

清水・八坂・下河原・円山における 隠れ場と眺望に関する研究

出村 嘉史¹・馬田 宣雄²・川崎 雅史¹・樋口 忠彦¹

¹正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂 4 -C1,
E-mail:demu@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp)

²非会員 株式会社電通関西本部 (〒530-8228 大阪市北区堂島2-4-5, E-mail:n.umata@dentsu.co.jp)

本論は、京都東山の清水・八坂・下河原・円山地域における大小のオープン・セミオープンスペースと休息空間の配置に着目して、具体的な空間の構成と眺望性を調査し、階層的に成り立っている隠れ家・眺望が組み込まれる系としての領域像を明らかにするものである。休息空間を提供する店舗として茶屋・料理屋・料理旅館などの21の店舗に対して主要な休息空間とアクセスを調査し、敷地やその周辺に関する平面図及びアクソメ図面を作成して、空間の構成と眺望性を分析した。結果は、寺社・公園を核とした門前町において階層的な系が形成されていることを示し、階層の最小単位である休息空間が大展望を獲得するための様々な工夫により、系および地域全体としての有機的な統合がみられた。

キーワード: 隠れ場・眺望, 京都東山, 階層的構造

1. 研究の背景と目的

歩いて楽しい都市は魅力的である。散策に適した地域には立ち寄る場所（休息空間）が充分にあり、様々な愉しみの活動・文化も生まれるだろう。そのような都市空間において、主要な部分となる街路や立ち寄る休息空間を含んだ公共的なオープンスペースは、どのように構成されるべきなのであろうか。

美しい風景を構成論的に説明する手がかりとして、地理学者の J. アプルトンは、生息地を無意識に評価する動物の機構と関連して、眺望 (Prospect) のよい隠れ場 (Refuge) の構成が人にとって居心地のよい場であることを説明した¹⁾。これに従えば、散策路周辺における休息空間は、ある程度の囲繞感と眺望が得られる場所が望ましいことになる。一方、C. アレグザンダーの示したパタン・ランゲージ²⁾によれば、洗練されたオープンスペースを仕上げるために、それぞれのオープンスペースが「より大きなオープンスペースへの眺望」をそなえ、すべての屋外空間がヒエラルキーを形成するようにすればよい³⁾とするパタン「Hierarchy of Open Space (114)」があり、図-1のように描かれる。こういった空間の捉え方をベースに、実際の佳良な散策路における構成を見直してみることは、地域の魅力を理解し創造するために重要である。

京都では、都市に極めて近い位置に山辺が広がり、この一帯で山とまちの均衡を慮りながら丁寧に開発さ

れた佳良な景域が多く見られる。ここには産寧坂（さんねんざか）やねねの道など愛称を持ち、独特の空間的構成とその利用の仕方が際立つ街路が多い。本論では京都東山の清水・八坂・下河原・円山地域を対象とする（図-2）。よく観察すれば、この地域に多数存在し訪問者に休息空間を提供する飲食店は、多くが室内空間によって成り立っていることが分かる。そこで対象地域において大小のオープン・セミオープンスペー

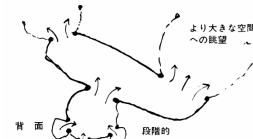


図-1 Hierarchy of Open Space

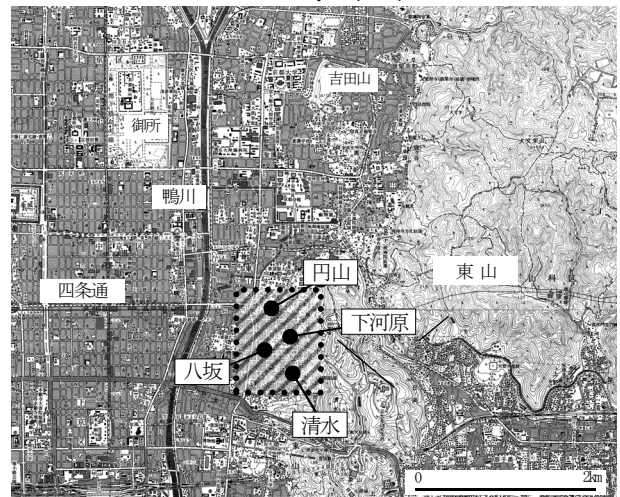


図-2 山辺扇状地に立地する対象領域

スと休息空間の配置に着目して、具体的な空間の構成と眺望性を調査し、階層的に成り立っている隠れ家・眺望が組み込まれる系としての領域像を明らかにする。

2 空間構成の表示と考察の指針

対象地域は後に述べるように核となるオープンスペースと街路を骨格に形成される地域である。この街路は地形によって得られる幾つかの「より大きな空間への眺望」の他に、多数の魅力的な導入口を備えている。これらに導入されると腰を落ち着けて雑踏から身を潜める空間が用意されている。

こうした休息空間を提供する店舗として 21 の店舗（茶屋・料理屋・料理旅館など²⁴⁾：図-4 参照）に対して実地調査を行い、主要な休息空間とそこまでのアクセスを把握し、これらの敷地およびその周辺に関する平面図及びアクソメ図面、補助的な図面を作成して、空間の構成と眺望性を分析した。

特にアクソメの図面に関しては、休息空間における開口部の方向とその眺望、休息空間に至るオープン・セミオープンスペースの構成、2階のあるものについては、そこへ至る階段や通路、そして庭・小道・街路の位置などに着目して作成した。これらを抽象化して表現する際には、経路および部屋の壁面と開口部のみを強調する模式図を用いた。尚、更にこれを地域全体においてどのように配置されているのかを敷地ごとに抽象化した。尚、敷地ごとの抽象化に際しては図-3の方法によるものとする。

本論は往来の中の休息空間を考察するために、段階的な屋外空間を「空間を開放する」方向へ説明する Hierarchy of Open Space とは反対に、大きな空間から小さな休息空間へ至る道筋に沿って考察する。

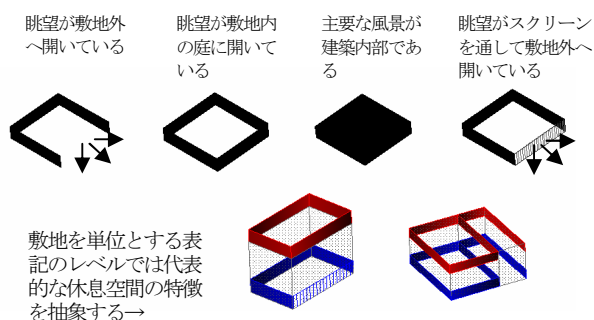


図-3 休息空間の配置図における表記法

3 対象地域における三つの系

本研究の対象地は、東山の山麓から中腹に位置してお

り、地形的变化に富む。その多様な地形的特性を生かした社寺・公園を核として領域的に広がる魅力的な町並みが連なる。オープンスペースを中心として領域的に広がる一連の町並みを系と定義すると、本研究の対象地には清水寺系、高台寺系、円山系の三つの系が把握される（図-4）。

清水寺系は、尾根上の清水寺を核とし、尾根と谷の入り組んだ地形に沿って清水寺へ至る一連の街路に沿った線的な町並みである（図-4,A）。高台寺系は、小高い丘に立地する高台寺を核とし、その麓の緩斜面に広がる面的な町並みである（図-4,B）。円山系は、山へ向かって段階的に傾斜を増す地形の円山公園を核とし、その回遊性を生かした公園内の店舗群とする（図-4,C）。

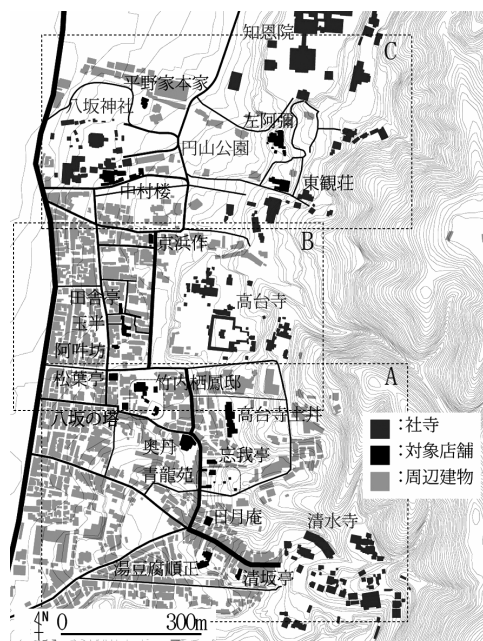


図4 清水寺系(A)・高台寺系(B)・円山系(C)

4. 清水寺系

核となる清水寺は清水山の中腹に位置し、その麓に二年坂・産寧坂・清水坂と続く一連の門前町が形成されている。よく知られるように、清水寺の訪問者は、境内で空間の絞りと開放の繰り返しの中を進んだ後に、薄暗い本堂から舞台へと出て、谷筋に向けて開くパノラミックな眺望を体験する（図-5）。清水寺へ至る二年坂・産寧坂の路上では、清水坂へと徐々に空間の閉鎖性を強めており（図-6）、清水寺境内で展望を得るに至る一連のプロセスをこの系の基本構造としている。

この系における休息空間は、特別な眺望の視点場としての役割を果たしており、視点場としての空間構成が、一連の道の中で立地条件と結びついた次のような特徴を持っている。やや隆起する尾根上の二年坂周辺の休息空間

としての店舗（高台寺土井）では、訪問者を敷地内の奥へと導き入れ、奥の庭、或いは遠景を眺めさせるような傾向が強い。この尾根と次の尾根の谷間にあたる産寧坂沿いの店舗（忘我亭、青龍苑、奥丹）は街路沿いに並んで立地し、敷地内の眺望を享受させる傾向が強い。大きく隆起する尾根上にあるが建てこむ建物により閉鎖的な空間となる清水坂における店舗（日月庵、順正、清坂亭）では、人々を街路から奥へと導き入れ、尾根上から谷筋越しに眺望を得る清水寺境内と同質の構成を取る（図-7）。また、系内の二つの尾根による谷部へ面する敷地（産寧坂周辺など）では、この谷間に沿って降りたところへ建つ八坂の塔をシンボリックに眺める視点場まで休息空間を導く傾向があった。以上の構成は系として図-8のようになる。

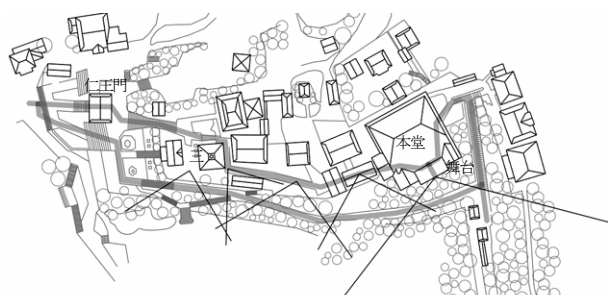


図-5 清水寺平面および展望の視点場



図-6 清水寺へ至る街路構成の変化

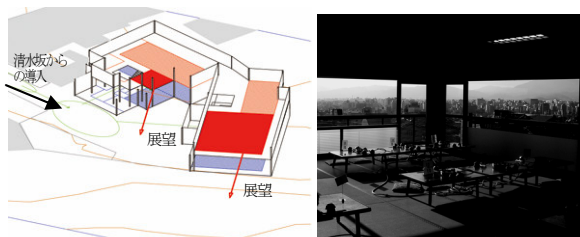


図-7 順正（清水坂）アクソメ図と室内からの眺望

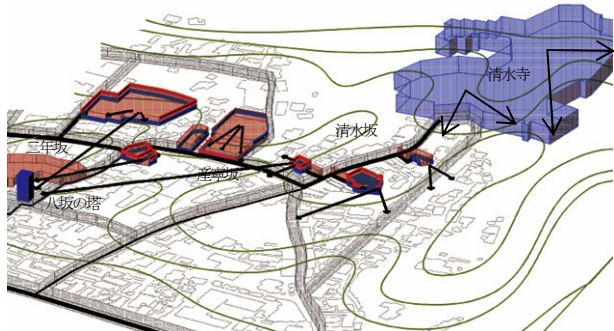


図-8 清水寺系の休息空間（眺望）と町並み

5. 高台寺系

高台寺境内に於ける空間体験は、平坦な地形故に劇的なクライマックスを核とするよりも、苑路を回遊する中で点在する庭への眺望の移り変わりを楽しむものとなっている。堂宇の地形条件によっては、庭を通して敷地外部の眺望を得るものもある（図-9）。

この麓に広がる高台寺系門前町は、町並みの区画と緩やかな傾斜によって風景が移り変わる面的な広がりの中を回遊する空間構成となっている。この回遊から脇へ入るとやはり特別な視点場を提供する休息空間がある（竹内栖鳳亭、松葉亭、玉半、京浜作、田舎亭、阿吽坊）。これらは地形による俯瞰の眺望を得難いため、二年坂周辺と同様に訪問者を敷地奥の部屋へと導き入れて敷地内の庭を見せるものや、二階から面する街路の往来を眺めたりする構成が多い。また、八坂の塔が同じ緩斜面上にある為、敷地内の庭などによる十分な退きと高さ（2階）を備えた奥の部屋からその眺望を取り込むものもある（図-10）。以上の構成は系として図-11のようになる。

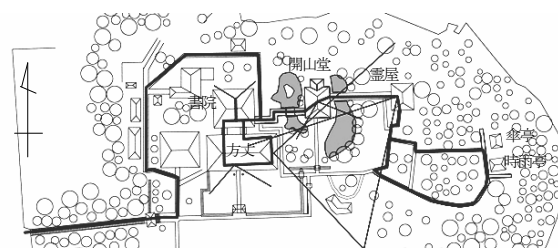


図-9 高台寺平面図および主な視点場

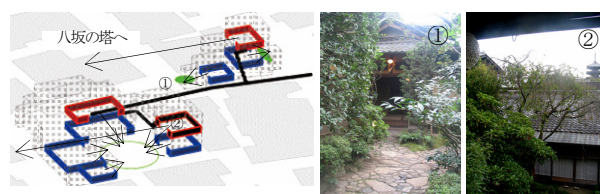


図-10 玉半の休息空間配置図と眺望

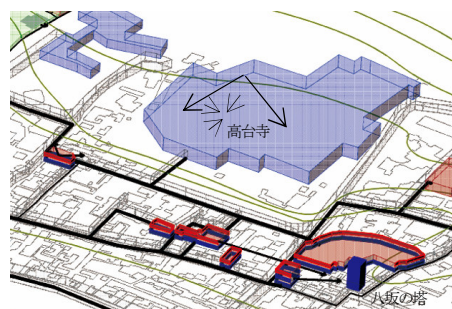


図-11 高台寺系の休息空間（眺望）と町並み

6. 円山系

円山公園は、東山の山麓から中腹にかけて段階的に傾斜が急になり、その中に苑路が網目状に張り巡らされた

回遊式の構造となっている。ここでは山辺下部では東山の稜線が目立った視対象となるが、稜線は見えなくなる山辺中部から上部では公園内の庭園風景や京都市街への眺望が特徴的な視対象となる。斜面を蛇行しながら流れるせせらぎの庭園を上下の軸として網目状に展開する沿路および周囲の道や公園内部にも配置される料理屋などの店舗が、公園内外の区別を曖昧にしており⁵⁾、上下の異なる眺望性を回遊によって人まとまりの体験とする。

この系の休息空間としての店舗（中村楼、左阿彌、東観荘）は、主に公園敷地の内部にある。山辺下部（公園西側）における休息空間は、回遊する訪問者を建物へと導き曖昧な境界を隔てて公園の風景を室内から眺めさせるものである。山辺上部では、その回遊性ととともに地形による京都市街への眺望を室内から得る構成となる（図-12）。以上の構成は系として、園内の回遊を中心とした図-13のようになる。

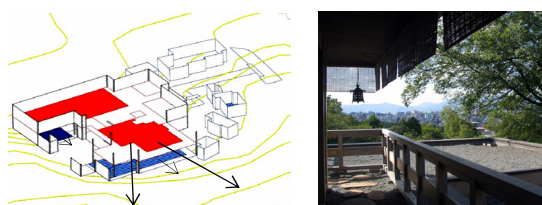


図-12 左阿彌アクソメ図と室内からの眺望

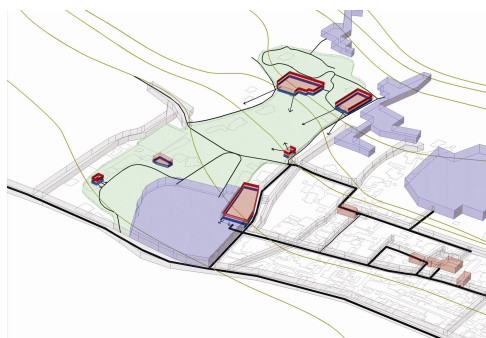


図-13 円山系に於ける休息空間と町並み

7. まとめ

以上の分析結果は、寺社、公園を核とした門前町の系において、階層的な系が形成されていることを示している。つまり、階層の最小単位である休息空間が大展望を獲得するための様々な工夫により、系全体としての有機的な統合がみられた。この系の構成は以下のようにまとめられる。

1) 清水寺系においては、全地形のレベルでは一つの尾根から谷を挟んで別の尾根へ移りこの尾根沿いにクライマックスの清水寺へ至るものであり、この間に道の囲いかたによって閉鎖性を高めていた。一つ一つの道のレベルでは、脇の休息空間へ引き込む構成になっており、その

構成の中の視点場のレベルでは、経路の最も奥において敷地内部および外部のより広い空間へ視界を広げる室内空間を備えていた。

2) 高台寺系においては、街路が平坦な地形の上に配され、清水寺系と同様に街路の脇へ導入するが、奥の部屋から敷地内の庭や街路の往来を眺める視点場が休息空間となっている。

3) 円山系においては、回遊する過程の移り変わる風景の中に休息空間がある。その休息空間からの眺望は山辺下部では公園内の風景を、山辺上部では外部への眺望を対象とする。

以上の三つの系を従属させるような、回遊性と眺望の視点場という原理で統合されるもう一つ上層の系として、本論の対象地域全体が把握される。この系に於ける休息空間に関わる性質は、核となる寺社・公園と共有する地形的条件をもつ領域に特有の規準に従いながら、アプルトンの隠れ場・眺望を備えた場へ向かって、段階的に空間の規模を変化させる構成であったといえる（図-14）。

本研究は清水・八坂・下河原・円山において、隠れ場・眺望によって説明される休息空間が階層的な空間構成の中に位置づけられることを示し、これらの寺社・公園などの核によって構成される門前町特性、及び地形的条件への従属性を明らかにした。

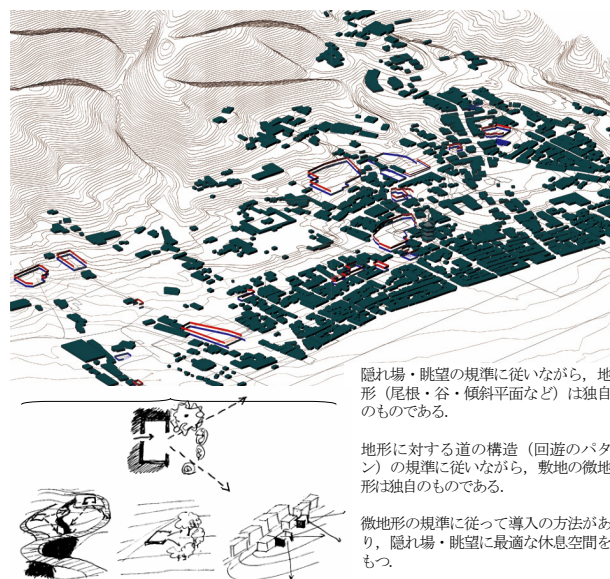


図-14 対象地域全体における系と特徴の階層

参考文献

- 1) J. アプルトン『風景の経験』法政大学出版局、2005
- 2) C. アレグザンダー『パターン・ランゲージ』鹿島出版会、1991
- 3) 前掲『パターン・ランゲージ』 p.295
- 4) 高台寺土井、忘我亭、青龍苑、坂口、奥丹、日月庵、順正、清坂亭、京とみ、竹内栖鳳亭、松葉亭、玉半、円徳院、京浜作、田舎亭、阿吶坊、中村楼、左阿彌、東観荘、浪漫亭、平野屋
- 5) 出村嘉史ら「近代京都の円山公園における景観構成の分析」土木学会論文集No.744、93-100、2003.10